

令和5年度 教育事業
おおずふれあいスクール (27年目)

1 事業概要

「おおずふれあいスクール」は、令和6年1月8日で27年目を迎えた。登録児童・生徒に対して、不登校で悩む子供たちの心に寄り添い、その心の居場所を提供するとともに、子供たちの自立を促し、進路決定に向けた支援を行った。



2 事業の目的 (ねらい)

- 不登校及び不登校傾向にある児童生徒に対しては、所属校や関係機関等との連携を図りながら、学校復帰を目指し、基礎学力の補充や生活の支援を行う。
- ひきこもりがちな青年に対しては、社会的自立を促し、就労に向けた支援を行う。
- 自己の存在感を実感させ、精神的に安心できる場所（心の居場所）の提供を行う。

3 企画のポイント

- 運営委員会を年間3回（6月、10月、2月）、大洲市教育委員会いじめ・不登校対策専門委員会を年間2回（6月、2月）開催し、登録生の受入状況や活動の様子について情報を共有するようにした。
運営委員会の構成メンバーは、5市町教育委員会教育長、県立高等学校長及び分校長、心理療法士・メンタルトレーナー、八幡浜保健所難病母子保健係長、大洲子育てサポートそよ風チームリーダー、帝京第五高等学校総合学科トライコース主任、おおずふれあいスクール専門委員会委員長・副委員長、国立大洲青少年交流の家所長及び企画指導専門職の計15名である。今年度から帝京第五高等学校総合学科トライコースが開講されたことから、主任の先生に新たに運営委員会に加わっていただいた。
専門委員会の構成メンバーは、校長も含めて大洲市内の小・中学校教員の計15名である。年8回「ふれあいデー」を実施している。スクール生の活動を直接支援する計画を立て、児童生徒とスポーツや工作、自然体験活動等を一緒に楽しみながら、児童生徒の自立に向けた支援を行った。
- スクール生の意欲や意思を尊重し、のびのびと活動できるようにして、心の居場所を実感できるようにした。ふれあいタイムでは、興味と関心に応じて選択できるように「自然体験活動」や「文化・スポーツ体験活動」を計画した。

4 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家

5 共 催 大洲市教育委員会

6 後 援 愛媛県教育委員会

7 期 日 令和5年4月1日～令和6年3月31日（通年）

8 場 所 国立大洲青少年交流の家及び近隣施設

9 対 象 大洲市及び近隣市町の不登校児童生徒等、16歳～22歳までのひきこもりがちな青年

10 募集人数 15人（登録人数5人）

11 日 程

- (1) 開所日：月・火・木・金曜日。水曜日は学校チャレンジデー。休日は学校に準ずる。
- (2) 開所日数：148日（1月31日現在）
- (3) 通所延人数：230人（1月31日現在）

	9:00	9:20		12:00	13:00	13:30		15:00	15:30
月・火・金	木	スタディタイム			昼食	清掃	ふれあいタイム	1日の振り返り	
木		①	②	③			専門委員との活動		

- マイプランタイムで1日の計画を立て、スタディタイムで学習を行う。
- ふれあいタイムでは、農園作業、スポーツ、工作、手芸等を行う。
- 水曜日の学校チャレンジデーは、可能ならば学校への登校を促す。

12 活動内容

自己の存在感を実感できるように、児童生徒の意欲や意思を尊重しながら様々な活動を計画した。

(1) スタディタイム

通所生の中には基本的な生活習慣や学習習慣の定着ができていない子供もいる。そのため、マイプランタイムで学習の計画を立て、スタディタイムで基礎学力の補充と学習習慣の定着を図った。また、中学生の通所生徒には、高校への進学も見据えて中学校と連携を取りながら学習支援を行った。

(2) ふれあいタイム

ア 自然体験活動

「おおずフラワーパーク」の一面にある体験農園「なるなる畑」で、講師の指導を仰ぎながら年間を通して様々な野菜を育てた。子供たちは自然の中で季節を感じ、種蒔きから収穫まで野菜を育てる喜びや苦労などを体感することができた。また、収穫した野菜を使って調理実習をした。子供たちから「おいしかった。」「また栽培してみたい。」といった感想が聞かれ、自然への感謝の気持ちや豊かな感性を養うことができた。

イ 文化・スポーツ体験活動

コースター作りや陶芸等の創作・芸術に親しむ活動や、バドミントンや卓球等のスポーツ体験活動を通して、心身のリフレッシュを図った。また、活動中に講師や友達とコミュニケーションを取ることで、人と関わることの良さを感じることもできた。

(3) ふれあいデー

年間8回「ふれあいデー」を実施し、創作活動やスポーツ等を楽しんだ。専門委員である大洲市教育委員会いじめ・不登校対策専門委員会の委員に来ていただくことで、通所生は専門委員のスキルを生かした様々な体験活動を経験することができた。また、活動を通して専門委員と通所生の関係が深まるとともに、専門委員の方々が通所生の様子を把握する機会となった。

13 事業の成果

運営委員会や専門委員会で情報を共有することで、各地域の子供たちの実態を把握することができた。事業に関するアンケートを運営委員及び専門委員にとったところ、「個々の事情に寄り添った活動が計画的に行われている。」「利用する児童生徒にとって心の居場所となっている。」などと回答をいただいた。事業の目的を概ね達成できていると思われる。

今年度は通所生に受験生が多くいることから、7月下旬に市内3つの高等学校の協力を得て進路説明会を開催した。学校生活や生徒の様子、卒業後の進路などについて丁寧に説明をしていただくことで、通所生の進路選択の手助けとなった。また、11月には帝京第五高等学校総合学科トライコースの生徒との交流を行った。トライコースは、中学校時代に学校に通うのが難しかったり不安を感じたりした経験がある生徒が通っている。そのため、通所生はトライコースの生徒に、勉強や進路の不安を気軽に話したり相談したりすることができた。

14 事業の課題

大洲市内や近隣市町でも不登校生徒・児童数は増えているが、当スクールへの登録者数は増えていない。支援を必要としている家庭に当スクールの存在を知ってもらうための広報・啓発活動に力を入れてきたが、十分とは言えない。また、送迎が困難などの理由で当スクールへの通所ができない家庭への支援も含め、今後も学校や教育委員会、その他の関係機関とより一層連携を深め、課題解決に向かいたい。

(担当：企画指導専門職 岡本 和也)